

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学 研究科	地理学 専攻
指導教員	所属・職名		氏 名
	観光学部・教授		豊田由貴夫 印
自然・人文の別	自然 ・ 人文	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	「穢れ」観念と観光・文化政策—バリ島における、葬送儀礼を事例として		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名
	文学研究科・地理学専攻・博士課程後期課程4年次		山本 早良紗 印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名
研究期間	2006	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、インドネシア共和国・バリ州を研究対象地域とし、グローバル化の進展する今日における人々の慣習のあり方、生活の様態を明らかにすることを目的とした人類学的研究である。具体的には、当該地域におけるグローバル化を考えるうえでとりわけ重要な位置を占める観光化の潮流と、他方、「伝統的」慣習に基づく死の観念のあり方、なかでも死の「穢れ」観に焦点を当て、葬送儀礼の事例を軸に検証を行う。国や州政府が展開する観光・文化政策が、地域社会としての慣習村(バリ・ヒンドゥーを核とする「伝統的」慣習の紐帯に基づく村組織)内における人々の文化的慣習にどのような影響をもたらし、それらはどう変化した／しているのか。すなわち、人々がもつ死の「穢れ」観が、政策によって促進される観光化を要因にどのように変化した／しているのかについて多角的に検証する。現地でのフィールドワークを通して、死の「穢れ」観の実践として立ち現れる葬送儀礼を観察し、近年見られるその変容点を抽出する。さらにそこで得られたデータをもとに、観光化が死の「穢れ」観にもたらした／もたらしている諸影響を明らかにすることを試みる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[葬送儀礼] [「穢れ」観念] [観光化]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の活動は、現地バリにおけるフィールドワークを中心とし、以下の 5 点に主眼を絞り行った。
①慣習村での村落調査(村民への聞き取りおよび儀礼の参与観察)、②宗教関係者への聞き取り調査、③観光業関係者への聞き取り調査、④行政機関での聞き取り調査、⑤資料・文献の収集、である。特に村落調査では、バリ中部に位置するギャニャール県のうち、観光化の進度によって選定した 4 つの慣習村を調査の対象とし、1)当該地域における観光化の歴史的背景、2)葬送儀礼および「穢れ」観念の現状、3)村の慣習について定めた慣習法典や規約の分析、を着眼点として研究活動を行った。

バリは、島民の約 9 割がヒンドゥー教徒である。彼らの生活基盤は、古くからその地域に伝わるとされる慣習(アダット)を共有し、その紐帯にもとづく村組織である慣習村(デサ・アダット)に置かれている。またバリ・ヒンドゥーでは、身分的階層制(カスタ)が採用されており、ブラフマナ・サトリア・ウェシアの上位三階層が貴族層とされ、彼らを、12 世紀に東ジャワで栄え、13 世紀にイスラーム勢力の侵襲を受けて滅びたマジャパイト王国の末裔とする説が有力である。他方、最下位階層スードラは平民層で、上述したマジャパイトの進入以前から現在のバリに居住していた人々だと考えられている。そして各慣習村は、共有する慣習を整理し、成文化した慣習法典(アウィッグ・アウィッグ)をもつ。その基本的内容は、13 世紀にマジャパイトによりバリにヒンドゥー教がもたらされる以前から受け継がれているとされているが、今日のようにヒンドゥーと結びつき体系化されたのはオランダ植民地政府の統治政策の一環においてであり、現在ではインドネシアにおけるヒンドゥーの最高機関であるインドネシア・ヒンドゥー教評議会(パリスダ・ヒンドゥー・ダルマ・インドネシア)の管轄のもとにある。

本研究で調査対象とした 4 つの慣習村が位置するウブド地域は、現在バリ内部でも有名な観光地の一つで、外国人観光客の人気を博している。ウブド地域の観光化は 1920 年代にさかのぼる。オランダの統治体制下、この地域で勢力をもち、ウブド王家を司っていたスカワティ一族のチョコレート・ラコー・スカワティと、その弟チョコレート・アグン・スカワティの兄弟が、ウブド地域における観光発展の礎を築いたといえる。この頃、バリの観光はオランダによってはじめて組織的に開かれ、1930 年代には多くの外国人が訪れた。そのなかには長期滞在を行い、今日の「バリ文化」の創出・構築に影響を与えた人物(主に芸術家や知識人)なども少なくなかった。チョコレート兄弟はそうした外国人を積極的にもてなし、「西洋」との橋渡しを行った人物である。また兄ラコーがのちに、オランダ植民地政府国民参事会のバリ代表のポストに就任したこともきっかけとなり、ウブド地域は芸術・芸能などの「文化的中心地」というイメージで世界的に知られていくこととなる。そうしたウブド・イメージは今日もなお続いており、国・州政府による観光開発の重要な一端を担っている。

今回調査を行った 4 村はすべて、観光の文脈で一般に「ウブド地域」と呼ばれているエリアに位置する。うち A 村は、ウブド地域の中心部に近く、芸能・芸術の興隆地として名高い観光地である。B 村は、中心部から 2~3 キロ離れた丘陵地に位置するが、観光用諸施設は複数あり、立ち寄る観光客も少なくない。他方 C・D 村は、中心部からは 15 キロほど離れた山間部にあり、いずれも観光用の諸施設はなく、訪れる観光客はほとんどいない。こうして観光化の進度により選定した 4 村で、葬送儀礼、および死の「穢れ」観に関する参与観察・聞き取り調査を行った結果、以下の 4 点が明らかとなった。

- ① **葬儀形態の選択をめぐる問題**: 葬儀形態は、死後一旦土葬をしたのちに複数世帯が合同で火葬を行う二次葬の形態をとるもの(I)と、死後直接、一世帯が単独で火葬を行う形態(II)との 2 種が確認できるが、いずれの形態を選択するか判断基準について 4 村で差異が見られた。なお、単独で火葬を行う II は、合同で行う I よりも経済的負担が圧倒的に大きい。また従来からの方法によれば、身分的階層制(カスタ)を基準として、貴族層は II、平民層は土葬を含む I を選択するのが一般的な風習であったといわれる。しかしながら今日、観光化が進展する地域ほど、カスタに関係なく、各家の経済状況や社会的地位の高低を判断基準として葬儀形態を選択するケースが一般化していることが明らかになった。

→考察①: 身分的階層制の衰退。代わりに経済力や社会的知名度に基づく新たな「階層」の創出。

研究成果の概要 つづき

② 火葬儀礼の規模、意味付けをめぐる問題: 観光化が進展する地域ほど、火葬儀礼にかかる費用が多く、使用する供物や祭具が大規模・華美・派手である。さらに、観光化が進展する地域ほど、火葬儀礼を「見世物」として顕示的に行うことや、儀礼に観光客を集客することに重点が置かれていることが明らかになった。

⇒考察②: 「見世物」としての火葬儀礼という意味付けの肥大化。あるいは、観光行事としての火葬儀礼という新たな意味付けの創出。

③ 葬送儀礼をめぐる新たに現出している問題: 上記の①②を踏まえ、とりわけ観光化の進展する地域において今日、葬送儀礼をめぐる新たな問題が起きている。それは、①②の状況を要因として、葬送儀礼が経済力や社会的地位を顕示する場に変化してきているという問題、それにより村員間の経済的・階層的格差が助長されていくという慣習村の社会関係をめぐる新たな問題が指摘される。これらに対処すべく、観光化の進展する地域では、タイプⅡの葬儀形態(土葬をして合同火葬を行う形態)を奨励もしくは義務付けるといった新たな規則を設ける場合が見られるようになってきている。また、州政府の方針においても、儀礼に使用する供物の規模や種類を制限したり、儀礼用の「制服」を推奨するなど、火葬儀礼の「見世物」的要素の肥大化を抑制する動きもあることが明らかになった。

⇒考察③: 観光開発を促進する行政は、ミクロなレベルにおいては観光化による儀礼の変容に対処しているのか。

④ 葬送儀礼の変化に伴う、死の「穢れ」観の変容をめぐる問題: 上記の①②③を踏まえ、とりわけ観光化の進展する地域において顕著に見られる葬送儀礼の変化に伴い、以下の2点において死の「穢れ」観が変容していることが指摘できる。

④-i 遺体をめぐる「穢れ」観の変化(衰退): 従来土葬は、死者の遺体に付された「穢れ」を清める目的で行われていた。しかし今日、莫大な費用が必要となるタイプⅡの葬儀形態(死後、土葬を行わず、直接火葬をする形態)が、「経済力をもつ者の象徴」とみなされるようになったことから、土葬の慣習が「貧しさ」を示すものとして避けられるようになり、死者の遺体をめぐる「穢れ」観念(コントロール)が衰退していることが指摘できる。

④-ii 遺骨をめぐる「穢れ」観の変化(創出): 従来土葬の後に火葬を行う際には、墓から遺骨を掘り出し、それを洗い人型に並べ、茶毘に付すという方法がとられていた。しかし近年、遺骨を墓から掘り起こすこと、墓穴を開けることを「穢れ(チュンタカ)」として、村の条例で禁じるケースが増加している。死者の遺骨をめぐる「穢れ」観が新たに創出されていることを指摘できる。

また州政府は、慣習村が土葬を含む合同火葬を奨励する一方で、遺体を長期間埋葬しておくのは不衛生として、土葬する期間の制限を短縮する方針を打ち出すなど、土葬と西洋的衛生観念の問題に対処する意図が読み取れる。

⇒マクロレベルでは、国・州政府が積極的に西洋的衛生観念を優先する法令を展開。それは慣習村にも浸透しつつあり、新たな「穢れ」観が創出されている事例が見られる。ただし慣習村では今日、上述した村員の格差の問題など新たな変化への対処が優先され、結果的に行政レベルとは異なるかたちで「穢れ」観を変容させている点に着目したい。すなわち、行政側と地域住民側の両者は必ずしも足並みを揃えているわけではないことがわかる。では、両者はどのように折り合いを保ち、相互に関連し合っているのか。これについては今後の課題としたい。

以上のように本研究は、バリにおける葬送儀礼の実践を見ることを通して死の「穢れ」観の今日的なあり方を探るべく、観光・文化をめぐる行政の政策と、慣習村での実践・動向の事例という2つの軸、すなわちマクロ・ミクロ両側面からの分析を行った。観光化の諸影響は葬送儀礼の形態に変化をもたらしているとともに、「伝統的」慣習としての「穢れ」観にも影響を与えていることが明らかとなった。ただし、政策としての観光化と実践としてのそれは異なる動態を示している。本研究では、それぞれの次元での観光化の詳細な状況を提示し、問題点を抽出することに重点が置かれた。この成果を踏まえ今後は、バリにおける観光と「伝統的」慣習の関係性の全体像を捉えることを目標としたい。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- 山本早良紗「バリ島における『文化』表象のあり方——『死』の儀礼をめぐって」
博士学位論文 (立教大学文学研究科提出)、2006年